

学び続けること、教育格差のこと

文教科学委員会 専門員

とだ ひろし
戸田 浩史

安倍総理が憲法改正案に高等教育を含む教育無償化を検討するとの意向を示して以来、多くの論議を呼んでいる。いわゆる「大学全入」時代を迎え、大卒が当たり前になりつつある今日、多くの企業では就職試験に大卒資格が必要とされている。新規学卒者の一括採用という日本独自の雇用システムの下で、経済的理由から大学進学を断念することがないよう無償化で進学を後押しし、貧困の連鎖を断ち切るとしている。

教育無償化には膨大な予算を要する上、大学教育の質の改善も遅れている。企業側が学生の採用に際し大学での学びの実績を重視しない実情や、学びが職業に直結しない現状も容易には変わらないだろうが、まずは「パイプライン・システムとしての学校教育制度」（山田昌弘『希望格差社会』）に乗せることが重要ということだろう。

一方、大卒層と非大卒層の賃金格差、昇進格差が拡大傾向にある中、非大卒層の著しく不利な雇用環境は放置されたままである。

視点を変えて、今は学ぶ意欲があれば、図書館を始め、ネットやムーク（MOOC：大規模公開オンライン講座）、社会人を対象とした大学の履修証明制度など、無料または安価で様々な教育の機会が提供されている。大学で体系的な教育を受けることも重要だが、こうした自主的に学ぶ機会の拡大や学んだ実績を適切に評価する仕組みも必要ではないか。

「沖仲仕の哲学者」として知られるエリック・ホッファー（1902～1983）のことを考えてみたい。彼は7歳で視力を失い15歳で奇跡的に回復した後、再び視力を失うことをおそれ、猛烈な読書を開始した。その傍ら、肉体労働を続け、思索と労働の生活を送ったが、正規の学校教育は受けていない。後にカリフォルニア大学バークレー校で政治学を講義するようになって、波止場で働くことにこだわり続けた。「教育の主要な役割は、学習意欲と学習能力を身につけさせることにある。学んだ人間ではなく、学び続ける人間を育てることにあるのだ。真に人間的な社会とは、学習する社会である。（略）激烈な変化の時代において未来の後継者となりうるのは、学び続ける人間である。学ぶことをやめた人間には、過去の世界に生きる術しか残されていない」（『魂の錬金術』より）。

どこで学んだかより、学び続けたいという意欲と学びの内容が適切に評価され、活かされるような社会の実現を期すべきではないか。目前の進路選択に悩んでいる人にはあまり役立たないかもしれないが、このような生き方もあるということを紹介してみた。

「自然は完全なものだが、人間は決して完全ではない。（略）他の生き物と人間を分かちもの、それはこの救いがたい不完全さにほかならない。人間は自らを完全さへと高めようとして、創造者となる。そして、この救いがたい不完全さゆえに、永遠に未完の存在として、学びつづけ成長していくことができる」（『魂の錬金術』より）。